

針仕事を引き継ぐ

笠井 みぎわ 総合研究大学院大学博士課程



修道院内の礼拝堂。祭壇覆い布がかけられた祭壇 (2017年3月)

こつこつと進めた針仕事をたとえ自分で最後まで成し遂げられなくても、何十年後に引き継ぐ「家族」がいる。引き継がれることで時間も場所も越えた、人と人の繋がりが生まれる。そんな針仕事のあり方をイタリアの修道院で見つけた。

修道院での労働

イタリアの巡礼地、アッシジ近郊の町、バステリアにあるベネディクト会の修道院では、国籍も年齢も異なるシスターたちが共同生活を営んでいる。彼女たちは、真っ黒な修道服に頭の前からつま先まで身を包み、祈りと感謝、奉仕と労働のなかで戒律にそった一日を過ごし、マードレとよばれる、修道院の最高責任者である院長から各々に見合った労働を与えられている。

修道院でのシスターたちの生活は、基本的に自給自足である。修道院内ではレタスやアーティチョーク、リンゴなどの作物が栽培されている。その収穫物を冬に備えて大量に貯蔵するため、冬が始まるまでに大人数でジャムやピクルスに加工し瓶詰めにする。シ

スターたちの労働には短期間で終わらせなければならぬ保存食調理の他に、刺繍やレース編み、編み物などを制作する針仕事がある。この作業のなかには、保存食調理と異なり、修道院内で緊急に必要なものとそうでないものがある。

前任者の針仕事

シスターたちの一日の労働は時間で区切られている。そのため一日の労働のなかで針仕事に従事するのは、個人の自由時間や、マードレに修道院内で緊急に必要なものを制作するよう依頼を受けたときに限られる。修道院内で制作される針仕事には、シスターたちが着用する作業着や祭壇覆い布のふち飾り用のレース編み、教会暦にそってデザイン

や色を変える教会刺繍などがある。教会刺繍とは、キリストの教えを文字の代わりに視覚化し、祭服や祭壇覆い布などに施される刺繍のことである。

しかし制作しているシスターの死亡や他地域への赴任によって作業が中断されることがある。個々の修道院に存在する共同体の戒律にしたがい、やり残した仕事は基本的にはその修道院に残されるからである。近年、針仕事の技法を知るシスターが減少しているため、次に針仕事に長けた人が赴任するまで一〇年、二〇年という長期間その仕事は放置されてしまう。

わたしが話を聞いたドイツ人のシスターは、バステリアに赴任して一年になる。彼女が今



ドイツ人シスターが制作した祭壇覆い布のボビンレース (2017年2月)

とりに組んでいるのは、何十年も前に亡くなったイタリア人のシスターがやり残した、祭壇覆い布をふちどるボビンレースである。見知らぬ人が以前とりに組んでいた作業を受け継ぐことは、その人の手のくせを観察することでもあるので、その人となりを想像する手段にもなりうるのとことだ。現在、修道院内は国際化が進んでおり、シスターたちは自らの出身国にかかわらず、その土地や国の言語を習得する必要がある。イタリアの場合、使用される言語は礼拝も日常の会話もすべてイタリア語である。あらたな土地で、新しい言語と風習に慣れるまでが大変であるとドイツ人のシスターは話していた。



修道院の庭。案内してくれたフィリピン人のシスター (2017年3月)

時間を越えてつながる家族
修道院に入るとき、シスターたちは左手の薬指に指輪をし、主イエス・キリストの花嫁になり家族の一員として迎え入れられる。そんななかで、新しい赴任先で最初に自分の仕事として与えられた針仕事の労働は、それが前任者からの引き継ぎの場合、以前その共同体にいた自分が会ったことのない「家族」を知る手段にもなる。

イタリアにおける女性の針仕事は、人目にふれることなく、密やかに修道院や家庭という閉ざされた場所で発展してきた。針仕事に使う針と糸はどこにでももち運ぶことができ、他人の目を気にせずその作業に従事することができる。修道院では家族がそうであるように居室、家具、食器などともに針仕事もはるかむかしの故人を含む前任者から引き継ぐ場合がある。修道院という外部の人には見えない空間のなかで、前任者の針仕事を受け継ぐことは、自分が経験していない生、祈り、労働など、他の人の秘められた時間を引き継ぐことでもある。故に針仕事は、国籍を越えた「家族」としてシスターたちを繋ぎ、彼女らを悠久の時間に結びつける働きもかねている。誰かがおこなっていた針仕事を観察し触れることで、自身の身体と精神を各修道院の戒律に合わせて適応させていく働きがあるのではないだろうか。